

爆睡天使 ネルネルネル子

エピソード1 宿命の四姉妹

作者:galanti

登場人物

睡魔 寝琉子

CV:寝美

本作品のヒロイン。名門「睡魔一族」に生まれた四姉妹の三女であり、正当な後継者と目される睡眠のエリート。

目閉 太郎

CV:多眠夫

ナレーター。シュラフランドの歴史を紐解くストーリーテラー。

睡魔 スヤヤ

CV:安羅華

ネル子の姉であり睡魔一族本家の長女。どんな状況でも3秒以内に寝られる天才的睡眠力の持ち主。しかしある事件を起こし一族を追われることに。

睡魔 サヤカ

CV:枕子

ネル子のもう一人の姉であり睡魔家一族本家の次女。スヤヤとは双子。出て行った姉の事で責任を感じ旅に出て姉の行方を追っている心優しい少女。

少女

CV:名無子

突然ネル子に勝負を挑む小さな少女。実はスヤヤが送り込んだ刺客。

老紳士

CV:通理管理

たまたま道を通りかかりネル子の睡眠を目撃する。

あらすじ

いにしえの世を支配した巨大国家シュラフランド。人々は天使と呼ばれた超越存在を自己の睡眠エネルギーにより召喚、その力により圧倒的な文明を築いていた。

国家の中枢を担ったのは睡魔家と呼ばれる一族。強大な睡眠力により、すべての召喚士より恐れられた存在である。そんな睡魔家に生まれた少女、睡魔寝琉子。一族始まって以来最高の睡眠力を持つとの呼び声も高い「睡魔四姉妹」の三女である。

この物語は、睡眠エリート睡魔一族の正統後継者であるネル子と、彼女を取り巻く人々との、睡眠女王の座をかけた宿命の対決を描いたものである。

1	現代、古びた建物の大図書館 内
	薄暗い図書館。男が一人古びたテーブルに積み上げられた本を次々と読みあさっている。
ナレ(N)	「私の名は目閉太郎。考古学者だ。いにしえの昔どこかに存在したという幻の国、シュラフランドについて調べ続けている」
	目閉、ふと本から目を上げて窓の外を見る。
ナレ(N)	「その国では現代の人間には想像すらできないような高度な文明が発達し、人々はあらゆる労働から解放されていたという」
	目閉、イスから立ち上がりコーヒーの入ったコップを片手に窓に近寄り、外を見る。
ナレ(N)	「シュラフランドの文明を支えたもの、それが『天使』と呼ばれる存在だ。それが何を意味しているのかはよく分かっていない。ただ、ひとつははっきりしていることは、かの国の人間たちは天使の力を借りて絶大な知恵と力を手に入れていたということだ」
	目閉、向き直り机の上の大量の本に目をやる。
ナレ(N)	「半ば伝説と化していた話だ。私もバカげたおとぎ話だと思っていた。今日ここで、一冊の書物を見つけるまでは」
	開かれたボロボロの本のアップ。
ナレ(N)	「ここにはシュラフランドの歴史が記されている。それによると、天使の力を呼び出すために、人々は無意識化で見る夢のエネルギーを媒介にしていたらしい。つまり、睡眠だ」
ナレ(N)	「しかしそれは非常な危険をもはらんでいたという。天使の力に匹敵するだけの睡眠力を備えていない人間は、逆にその力に飲み込まれ、永遠に眠り続けることになる」

	<p>目閉、再び椅子に座り本のページをめくる。</p> <p>ナレ(N) 「そんな危険な天使を自在に操った一族が存在したという。これは、眠ることにより国を繁栄させ、そして破滅へと導いた睡魔一族に関する伝承の書である」</p>
2	<p>シュラフランド 道ばた 外</p> <p>人気のない道を一人歩くネル子。</p> <p>ネル子 「んー、今日もいい天気ね」</p> <p>ネル子(N) 「私の名前は睡魔寝琉子。今日はとても天気のいい日だから一人で散歩をしている」</p> <p>ネル子 「こんな日にはすぐに眠くなっちゃうわね」</p> <p>あくびをするネル子。道の向こうから小さな少女が歩いて来るのに気づく。</p> <p>少女 「お姉ちゃん、睡魔の人？」</p> <p>ネル子 「え、ええ。そうよ。よく知ってるわね」</p> <p>少女 「そう。じゃあ、あたしと勝負してよ」</p> <p>ネル子 「え……は？」</p> <p>少女 「この国で一番うまく眠れるんでしょ？ 天使を自由に呼ぶことができるって聞いたわ」</p> <p>ネル子 「いや……その」</p> <p>少女 「あたしも結構自信あるのよ。どう？ 勝負してくれる？」</p> <p>ネル子 「しょ、勝負って……天使ってそういうものじゃ……」</p> <p>少女 「いいわ。こっちが勝手に始めさせてもらうから」</p> <p>少女、枕を取り出す。そのまま地面に落とし、それを追うように倒れ込む。</p> <p>少女 「ぐう……」</p>

ネル子 「ちょ、ちょっと……キャッ」

驚くネル子。周りには何の変化もない。

ネル子 「も、もう。仕方ないわね……ええと」

辺りを見回すネル子。道端に木陰を見つけてそちらに走る。

ネル子 「それっ……スヤスヤ」

あっという間に寝るネル子。

少女 「ぐう……」

ネル子 「スヤ……」

通りかかる紳士風の老人。二人を見つけて驚愕する。

老紳士 「こ、これは！ 何ということじゃ！」

後ろに倒れて腰を抜かす老人。

老紳士 「こんな壮絶な戦いは見たことないわ！」

S E : 鳥のさえずり、木の葉のざわめき

老紳士 「お、恐ろしい……」

震える紳士。

ネル子 「ん……」

目を覚ますネル子。ゆっくりと起き上がる。

ネル子 「はぁ……だから嫌だったのに……」

少女の方を見てため息をつくネル子。少女に近づき抱きかかえる。

ネル子 「当分目を覚まさないわね」

木陰にゆっくりと寝かせる。

ネル子(N) 「睡魔家の娘ってだけで、こんな危ない目によく合う。私はただ静かにうたた寝でもしていただけなのに」

老紳士	「あわわ……」
	ネル子を見て怖がっている老人。
ネル子	「おじいさん、大丈夫？」
老紳士	「あ、あんた……タダもんじゃないな！」
ネル子	「ううん、ただの女の子よ」

3	<p>豪邸 スヤヤの寝室 内</p> <p>少女(スヤヤ)が豪華なベッドで眠っている。おもむろに目を覚ます。</p> <p>スヤヤ 「……ふう……」</p> <p>隣にある大きな窓から外を見るスヤヤ。</p> <p>スヤヤ 「あの子、ダメだったのね。少しは役に立つと思ったのに。それにしても……」</p> <p>微笑むスヤヤ。</p> <p>スヤヤ 「大きくなったわね、ネル子」</p>
4	<p>道ばた 外</p> <p>ハッとしたように顔を上げるネル子。</p> <p>ネル子 「スヤヤ姉さん！」</p> <p>目の前にはスヤヤの姿。</p> <p>スヤヤ 「クスクス……どうしたの？ そんな顔しちゃって」</p> <p>ネル子 「戻ってきたの？」</p> <p>スヤヤ 「クスクス……ええ」</p> <p>ネル子 「な……なぜ……」</p> <p>スヤヤ 「なぜって、決まってるでしょ？ 私を追い出した睡魔への復讐を果たすためよ」</p> <p>ネル子 「そ、そんな」</p> <p>スヤヤ 「あなた、睡魔を継ぐんですってね。おめでとう」</p> <p>ネル子 「姉さん……」</p> <p>スヤヤ 「昔から寝るのが大好きだったものね。ネル子。だから」</p>

	<p>恐ろしい笑みを浮かべるスヤヤ。</p> <p>スヤヤ 「ずっと眠らせてあげるわ。永遠にね。優しい姉でしょ」</p> <p>ネル子 「スヤヤ姉さん、やめて！」</p> <p>目を閉じようとするスヤヤ。ハッとして目を開ける。</p> <p>スヤヤ 「チッ……」</p> <p>スヤヤの姿が消える。</p> <p>ネル子 「姉さん、どうして……」</p> <p>呆然とするネル子。</p>
5	<p>豪邸 スヤヤの寝室 内</p> <p>ベッドで上半身を起こして窓を眺めるスヤヤ。</p> <p>スヤヤ 「よくここがわかったわね」</p> <p>サヤカ 「ええ、とても苦労しましたわ」</p> <p>ドアのそばに人影。振り向かないスヤヤ。</p> <p>サヤカ 「でも、姉妹ですもの。必ずお会いできると思っていました」</p> <p>ベッドに近寄る人影。ゆっくりと振り返るスヤヤ。</p> <p>スヤヤ 「そう。元気そうね、サヤカ」</p> <p>日の当たる場所まで来るとスヤヤと瓜二つのサヤカの姿が。</p> <p>サヤカ 「はい。お姉様も色々なさっているようですわね」</p> <p>スヤヤ 「ふふっ、どうかしら」</p> <p>サヤカ 「ようやくお会いできて、とても嬉しく思いますわ、スヤヤお姉様」</p> <p>微笑むサヤカ。</p> <p>スヤヤ 「そうね。本当に久しぶり」</p> <p>手を差し出すスヤヤ。サヤカはその手を握る。</p>

スヤヤ 「すう……」

眠るスヤヤ。真顔に戻るサヤカ。

サヤカ 「……そう。歓迎してくださらないのね……」

目を閉じるサヤカ。

サヤカ 「……………」

ナレ(N) 「彼女たちはシュラフランド最高の睡眠力を誇る睡魔家に生まれた姉妹だ。エリート一族の中にあってもかかってないほどの力を持つと言われた彼女たちは、その力ゆえに後に国を巻き込む大きな騒動を引き起こしてゆく」

(F r ・ O)

終わり